

作文を通してみた 子どもの可能性のすばらしさ



太 田 貞 子

もくじ

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|----------------|-----------------|--------------------|----------|-------------------|------|------------------|---------------|--------------|-------|-----------|-----------------|------|--|
| 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| おわりに | おさいふがいっぱいになったよ | 犬の耳は音のするほうにうごくう | かおをかくんとして、しんでいたんだよ | だ。れもないので | せんせい、えがすみっこになったあ、 | おてがみ | みゆきちゃん ちよっとみみかして | はやくこないかなあ あはは | すいかのたねまいたんだよ | 保育と表現 | ここにせんせいいて | せんせいので、でもあったかいよ | であい | |
| | (二月) | (一月) | (九月) | (九月) | (七月) | (七月) | (六月) | (五月) | (四月) | (四月) | (四月) | (四月) | (四月) | |

1 であい

— (四月)

ここ二・三年、一年生を担当してみたいと考え続け、希望もしてきました。それは、ひとつの疑問にぶつかっていたからです。五・六年を担当したときも、三、四年を担当したときも、話しかけたことに対して、学級に何人かは、

「わかんない。」

「まあね。」

と、対話にならない返事・答えが返ってきて、いらだちをかんじていたからです。そして、その表情もかわりがないというような、素振りなのです。

ほんとうにわからないことでもないのに、なにがそうさせているのだろう。何か不利益になることでも話しかけたのだろうか、考えこんだりもしました。

もっと注意してみると、体を動かすことや、手先を使うことにも、できるだけ動かさないうすまそうという態度にも気づきました。

子どもって動くことがすきで、話すことも聞かすこともすきだとばかり思っていたわたしには疑問で、最近の子どもは、入学してきたときからこうであるのかと、一年生を担当してみたかっただけでした。

希望はかないました。十何年ぶりの一年生担任です。

子ども本来の表情ゆたかな姿をみたいと思いつながら、入学式にのみきました。前川分校の十名の子どもたちは、真新しい服で、またこともない、広い本校の屋体に乗っていました。川崎小学校本分校いっしょの入学式なのです。(前川分校に入学してきた子どもたち

は、保育所とか幼稚園を経てきてないので、大ぜいの集りに入るのは、はじめてなのです。)

いよいよ担任が発表され、担任によって一年生の名前が呼ばれます。自分の名前がいつ呼ばれるか、息をつめるようにして、わたしの方を見つめ、

「はい。」

と、せいっぱいの返事をした瞬間、ほっとしたように肩の力をゆるめて、後方の席にいる母親をふり返るその顔は、何んともいえない笑顔でした。表情があったのです。わたしは、この笑顔にほっとして、

「さあ、一年生の先生だぞ。」この笑顔をだいに育てようと、自分にいきかせましたのです。

子どもたちにとっては、人生ではじめての先生であるわけです。これから先、何人かの先生にであうであろうが、先生ぎらいは学校ぎらいにつながります。学校ぎらいはまた、人間ぎらいにもつながることでしょう。人間として魅力をもった先生にならなければと、翌日をむかえました。

前川分校は、児童数四十五、六名の四年生までの分校です。前年度までは、この年度より児童数が二、三名多かったのですが、五名の教師が割り当てられていましたが、この年度は三、四年生が複式学級になり、教師は三名になってしまいました。

でも、つねに『子どもにとってプラスか』という基準で行事などをくみ、のびのびと個性のゆたかな子どもを育てたいと、語り合いながら一年間を送ることができました。

2 せんせいので、でもあったかいよ — (四月)

四月九日から前川分校に、子どもたちは登校です。体格に不つりあいの大きなランドセルを、自分の名前の机の上におろすと、どの子も申し合わせたように、「ハア。」といきをつきました。

「ピカピカのランドセルねえ、いいなあ。だれにかつてもらったのかな。」

と、声をかけてみました。

「おじいちゃん。」

「おじいちゃんが、仙台のデパートからかつてきてくれたの。」

「ごごたのおばあちゃんかつてくれたの。」

と、にぎやかに返ってきました。磁石でしまるとか、何の革だとか説明する子もいました。

しかし、一弘君・妙子ちゃん・美幸ちゃんは、ほかの子の答えと説明に圧倒されて、わたしの顔をじっとみつめていました。

「一弘君のもいいね おおおもいね、がんばってしょってきたんだね。」

というと、顔を紅潮させて、

「うん。」

と、首をふりました。

「だれ、かってくれたのかな。」

と、また続けると、

「ベゴばっば。」

と、一言。ベゴばっばとはと思いながら、からだをかがめて、椅子にかけている一弘君と同じ高さにして、

「ベゴばっばのおうちには、ベゴいっばいいるのかな。」

というと、

「うん。」

と、にっこりしました。

にっこりすればしめたものです。いつかは話を続けてくれるようになると思いながら、妙子ちゃんや美幸ちゃんのそばへ行っても、同じような話しかけをしました。

一週間もすると、そろそろ手の爪ものびてきた子もでてきました。

今の農村の母親たちは、勤めにでているので、朝、

「早くしないと学校におくれるよ。」

と、声をかけるのが、せいっぱいようです。

それなのに、学校に來れば『せいけつしらべ』の表がはってあったりして、爪がのびていけば×印がつかます。一年生の子どもには、

よほど器用でもないかぎり、自分では爪は切ることができません。自分の責任でもないのに×印がつけられることになるのです。わたしは×印をつけるよりも、爪がのびている子を見つけたら、一年生

では切つてやりながら、次第に自分で切れるよう、爪切りを用意して、切り方を教えてやった方がよいと考えていましたから、妙子ちゃんにも、

「妙子ちゃん、ここあったかいよ。爪切つてあげるよ。ここにならんでこしかけよう。」

といいながら、爪を切つてやりました。そして、

「妙子ちゃんの手、ふわふわしてかわいいね。先生の手とくらべてみよう。」

といったら、

「せんせいので、でもあったかいよ。」

と、いってくれました。かんじを言えたのです。

そして、二、三か月のうちには、

「せんせい、じぶんでつめきってみる、せんせいみてて。」

と、教室のうしろから爪切りをもってきました。

また、どこかで窓ガラスの割れた音がしたときでした。

「あらあけがしなかったあ。」

と、音がした方に、わたしが走っていったとき、この入学したばかりの子どもたちも、ぞろぞろ、

「けがしなかったあ。」

「けがしなかったあ。」

と、走ってついてきました。割った子どもは悪いことをしたと、首

をうなだれていました。このようなきとき、

「だれ、ガラスわったの。」

と、責めることばで、わたしが走ったらどうでしょう。子どもたち

もきつと、

「だれ、ガラスわったの。」

と、責めことばで走ったことでしょう。割ろうと思って割る子ども

はいません。割ったときには、悪いことをしてしまったと悔いてい

るのですから、もう責めることはないし、それよりもだいじなのは

いのちだと考えています。

「よかったね。けがしなくて。いっしょにガラスをひろおう。ささ

るとあぶないからね。」

というと、

「うん、先生、ぼくちりとりもってくる。」

と、いって、いっしょにガラスの破片をひろいました。これも一年

生の子どもたちはみていたのです。

親に子がなるように、教師の行動や口調も子どもににるのです。

いままでにも、はっとさせられるようなことが、何回もありました。

3 こにせんせい

— (四月)

入学して五日ほどたちました。あそんでいる子どもたちの顔から、

不安もだいぶうすれてきました。

このころから『絵かき』をはじめてみました。フェルトペンを使

って、

「先生や、おともだちにおしえたいことをかいてね。」

と、いって、西洋紙いっばいにかかせたのです。

もじもじしている子には

「仁美ちゃん、どんなお話おしえてくれるかな。」

などと、声をかけて、かくことをしぼる手伝いをしました。

絵はたちまちのうちにかきおわったので、

「絵のおはなし、先生やおともだちにしてくれるかな。」

と、といかけると、

「できるでさる。」

と、張り切りようでした。

やはり、聞いてくれる対象がいるということが、子どもたちにと

ってうれしいのだと思います。だから喜んでかく子どもたちにする

ためには、心をこめて話をさき、心をこめて読み、しっかり受けと

めてやるのが、担任の仕事だと思いました。

それから、もうひとりの熱心な聞き手、読み手はおかあさんです。

おかあさんは、こんなことも気づく子になったのか、こんなこともかけるようになったのかと、わが子をみなおしながら喜んでくれます。

このだいたいな協力者のためにも、学級通信で子どもたちの『絵』や『作文』をしらせてやらなければと考えていました。

はじめてかいた『絵』です。そして絵についておはなしをしてもらったのです。(おはなしは テープにとっておいたものです。)

一弘



△おはなし▽

(話すとき、非常に緊張していて、手をみたら にぎりこぶしをつくっていました。)

かいじゅう
ウルトラマン
やつつけた

道信

石井美香



いし井たみか

(よろこんで話してくれました。)

道路まがってくるとき、雨がふっているから、かさをさしてあそんでたの

(にこにこ顔で、みんなに語りかけるように。)

学校かえったら、となりの家から、わたしのおかあさんの声が、わっはっはっはときこえてきたのだから、わたしは安心して、カバンをボックスに入れて、木ごやにねこの赤ちゃんを見に行ったの



(表情がなんともいえないゆたかさ。)

んとね、太田先生ごっこしたのうたをうたったり、なわとびもしたんだよ

これ京子ちゃん
これ百恵ちゃん
おもしろかったあ

(まじめな顔で)

わたしと美香ちゃんと
恵美ちゃんと仁美
ちゃんとあそんで
いたら、
雨がふってきたので、
かさかぶってたの



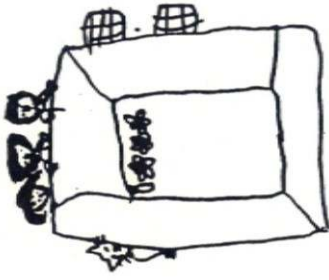
(まじめな顔で、仁美ちゃんもきて、といつて、仁美ちゃんと手をにぎりながら。)

小さなとうふと
大きなとうふがある
から、どっちかいま
すか、
そしたら大きい方が
います

(まじめな顔で)

これ先生
これ百恵ちゃん
ままごとしてあそん
でた
これりんご
これめろん
これいちご
これさくらんぼ
これぶどう

おまかせなさい



あめ



(緊張していて、ひとつひとつ話すようす。)

あのね、妹が外に行
って米といでたの
これわたし

これが二ばんめの妹
そして チュウリッ
プさいてた
みてたら びしょぬ
れになったの

(緊張して、ここに先
生いててと わたし
にくつつきながら)

えとさ

京子ねえちゃんと

わたしと 春美おね

えちゃんと なつみ

かんだべたの

にゃんこはねてたの

しっぽをぶるぶるし

てねてたの



(にこにこしながら、
みんなに話しかける
ように。)

あのね
学校かえるとき先生
がバイバイしてくれ
たので、
わかれ道でわたしも
恵美ちゃんたちとバ
イバイしたの

このような『絵ばなし』を四月中続けました。それぞれの子どもの
絵にも、話すことにも特徴のあることに気づきました。同じ出発
点にたって指導したのでは、子どもたちはとまどいをするのではな
いかと思いました。それで、これまでに育ってきた子どもの歴史を
たどって、表現についてだけでも考えてみようと思いました。

4 保育と表現

— (四月)

十名だけの子どもで、環境にもあまりちがいが無いと思ってきた
のに、育ち方はちがっていました。

子どもたちの保育と表現 (四月しらべ)

番号	名前	うま れ月	なんぼん の子か	乳	哺乳 期間	幼児期・主に せわをした人	外あそび をしたか	入学してから 帰宅時にいる人	話すことについてなど	備考
1	一弘	9	1	人工	12か月	曾祖母 81才	しない	曾祖父	話すとき、非常に緊張していた	⑥六月 ↓ ①
2	道信	10	3	人工	12	祖母 54才	しない	いない	自分のことを中心に話す よくしゃべる はさみよくつかえない 自分のしたこと 相手のようすなど をおりまぜて	⑥六月
3	石井 美香	4	4	母乳	10	母 33才	○	家族	話すようすがにこやかで話題が豊富	①
4	大宮 美香	5	1	母乳	12	母 33才	○	家族	せわずきで話すことにすじがある	①
5	京子	11	1	人工	12	祖母 59才	○	祖母・弟	自分のことを中心に話す が脈絡がはつきりしない	⑥六月
6	恵美	11	1	混合	12	祖母 61才	しない	祖父 母	恵美とふたご とはすくない 恵美より依頼するこ	⑥六月
7	仁美	11	2	混合	12	祖母 61才	しない	祖父 母	断片的な話し方 犬がいた 花がさいた	⑥六月
8	妙子	12	1	人工	10	祖母 53才	しない	祖母・妹	よくしゃべる 自分のことを中心に	⑥六月
9	美幸	1	3	人工	10	祖母 60才	しない	となりの家に叔 母がいる	話す内容にすじがあり観察もしっか りしている	⑥五月
10	百恵	3	1	母乳	12	母 30才	○	祖父 母		①

この表と四月十三日の絵や話したことからを、参考に考えてみますと、はからずも、母乳で育った三人は、表情も豊かで絵、話すことも筋があつて、観察もしっかりしていました。

これは母乳ばかりがそうさせたのではなく、母親が家でしごとをしながら育てるといふことで、生活の範囲が広がったことも考えられます。

(表の備考で このグループをかりに①としておきました。)

道信君や恵美ちゃんは、まじめな顔でどうにか話すのだけれども、自分のことが中心で、ややもすると 実際になかった空想めいたことも、ときどきまじっていました。

(表ではこのグループをかりに②としておきました。)

一弘君と妙子ちゃんは、話すとき非常に緊張していて、手をにぎってこぶしをつくりながら話すので、わたしが手をつないでやり、肩に手をかけてやらなければなりませんでした。

(表ではこのグループをかりに㊦としておきました。)

なぜこのようながいがみられるのでしょうか。㊦のグループの子どもたちのようすをみながら、自分の子育てをふり返ってみたり、母乳をふくませている母親のようすを観察してみたりしました。やはり表現力を養う対話が、この時代からあったのです。

母親はしっかりとわが子をだきしめて、オッパイをやっています。そして、ときどき、まだ話もできない子に、

「よしよし、いい子いい子。」

と、声をかけては、やさしいまなざしで、わが子の顔をのぞいているのです。少し育つと赤ちゃんは、のんでいるオッパイと、もう片方のオッパイを両手でつかんで、母親に話しかけるようにしてのんでいます。

母乳で育った三人の母親にききました。ハイハイして、よちよち歩きするようになって、決して子どもにべったりではなく、田畑につれて行き、ムシロをして、そこで遊ばせながら、仕事をしていたということ。ムシロの上におかれても、安心感と対話は常にあったのだといえるでしょう。

㊦のグループの子どもたちは、母親が働きにでているので、祖母が哺乳のしごとにあたってくれたようです。だから、母親のようではないでしょうが、対話はなされて育ってきました。

㊧のグループの一弘君の家は旧家で、祖父母夫婦と父は店をもっていたし、母は農繁期以外はひとりで田畑をきりまわしていたのです。だから母親は夕方に帰っても、子どもたちに声をかけてやる余裕もないくらい多忙な暮らしなのです。

いまの時代は、経済的に楽だから母親が家庭にいたりとか、貧しい

から外にでて働くということではないようです。前川の部落もそのようです。その家その家のくらしの方針のようなものがある、母親が家にいるか、でて働くかきまるようです。

㊦のグループの家庭は、いずれも家族揃って、生産のしごとにたずさわっています。農産物ばかりでなく、食物も手作りが多く、加工品はあまり買っていません。だから子どもたちも「しそまきづくり」とか、「かしわもちづくり」「すみやき」などのしごとも、てつだっています。このような生活をしてきた子どもたちは、作文をかくにも題材にことかかなかったし、手先も器用で、手順よく作業ができました。わたしもこの子どもたちと対話をしながら、いろいろなことを教えられました。

ここで母乳のことをとりあげましたが、母乳で子どもを育てよと主張しているのではないのです。いまの社会のしくみの中では、人工業にたよらずにはいられない家庭の条件もあるからです。それよりも、一年生担任者として、子どもにも母親がかかわってやれなかったところから出発して、生活をみていかなければと考えるから、保育歴を丹念にみることをしたのです。

このことは、三年生を担任しても六年生を担任しても、どの教科であっても、同じように子どもたちの生活歴のうえにたつて、指導の出発点を考えなくてはならないといえるのではないのでしょうか。

『絵のおはなし』は四月中続けました。(子どもの話だけ記しておきます)

㊦グループの石井美香ちゃん

。四月十五日(ねこの親子の絵に)

学校かえってからね、カバンをボックスに入れて、ねこのラチ

とあそびました。

おやちゃん（ねこの親）のごはんとか水をあげました。

。四月十七日（畑にねずみがでてきた絵に）

わたしがはたけで、じゃがいもうえをてつだって、三時になつてから、車の中でおやつをたべたの

おやつをたべてから、はたけであそんでいたら、わらの下から親ねずみと子どものねずみがでてきました。

④グループの藤田恵美ちゃん

。四月十五日（おみせやさんと恵美と先生の絵に）

あのね、うりやさんして、恵美と先生とおもちゃさんに行ってくだものと、とうふかったの

。四月十七日（おみせやさんと恵美と先生の絵に）

先生と恵美がパンかいに行ったら、さかなとみかんとトマトをかってきたの、とうふ一こもかったの

⑤グループの大宮一弘君

。四月十五日（どうろの絵に）

おうちにあなをあけて、入ってここを通過って、ぼうしをちゃっこく（小さく）して、もどって、水道のところをあなあげた。

。四月十七日（どうろとたんぼとくもの絵）

おうちからずつとぼつていくと、たけちゃんい（家）で、こたんぼ、ここはくものおうち

少しずつ緊張もうすらいで、絵をかくことも楽しくなつて、はなうたでかく子もでてきました。またお話も話らしくなつてきました。話すことについては、おとなでもひとつひとつの文や、単語を厳密に意識して話をしていくわけでもないし、これを意識していたら、

かえって話すことそのものが、成立しないのではないかと考えているので、このように話してね。などとは特別に要求はしませんでした。みんなの前で、これだけ話せたことに、全員で拍手をしてやっています。

5 すいかのたねまいたんだよ

——（四月）

四月二十日すぎても寒い日がありました。そんな日『おしくらごんべ』のような、できるだけからだをふれあうあそびをしていました。

妙子ちゃんや美幸ちゃんは、あそんでいるといつのまにかわたしのところへ寄ってきて、

「先生のせなか、あったかい。」

といいながら、せなかに手を入れてやったり、「てをつないで。」

と、わたしの手を自分の手へもっていくのです。おかあさんがいそがしくて、からだをつけてやっている期間が、充分でなかったのかなあと思いつながら、

「オッパイさわったっていいよ。足にもさわったっていいよ。」

などといつてやると、全員がみくちゃんにさわりました。こんなとき、サルの子育てのことや、『キタキツネものがたり』の映画のことを考えていました。

サルやキツネ、犬も猫もそうだけれども、生まれてしばらくの間は、親は子どもを自分のからだにくっつけてだいに育て、やがてエサをとることなどの自立の方法を教えて、独立させるという育て方をしています。

このことは人間にもあてはまるのではないかと考えていました。しよせん人間も動物です。乳児期に母親のからだとのふれあいをもつことの意味もあるのではないのでしょうか。こんな乳児期の忘れ物みたいなしぐさがあったけれども、子どもたちは集団の中のたのしさを感じはじめました。

朝、教室に入ると、ぐるっととりかこんで、

「あのね。」

「先生。」

と、いちどに話しはじめるようになりました。その話は家のできごと、登校途中のこととさまざまだけれども、

「先生、おかあさん、てっばんやきで、たまごやきつくったんだよ。」と、いつてきた子どもには、

「あれ、フライパンでつくったんでないの。」

と、かえしてやると、

「フライパンだとね、ひとりぶんきりできないから、おかあさん考えたんだって。」

と、答えて話が続きます。

「あらそうお。」とか、「ううん。」

と、かえしたのでは、話が続きません。対話のおもしろさや、満足感を与えるためには、続けさせる答え方をしてやらなければならぬ。書くことに発展していったときに、対象を追い続けるもの

の見方・考え方にも通じていくのではないかと考えます。

授業においての子どもと教師のやりとりにも、このような配慮がだいじなのではないでしょうか。そしておもしろい話などは、

「めえちゃんのおかあさんね、はつめいしたんだって。たまごやき

をつくるときね、みんなのぶんをいつかいでつくるために、てっばんやきでやくことを考えたんだって。」

と、いつてやると、またそれに話が続きます。こんな生活をしてい

るうちに、あんなに話すときに緊張していた一弘君が、みんなにわかるような話ができるようになりました。

四月二十日の絵に、

。すいかのたねまいたんだよ。しかくいはいはこと、まるいはこに、

おかあさんとふたりでまいたんだよ。

と、事実をきちんとつかみとって話せるようになったのです。つづく、人間は集団の中で成長するんだなあと思いました。

6 はやくこないかなあ あはは (五月)

五月に入って運動会や家庭訪問があつて、子どもたちの生活経験もふえてきました。なかでも、週二回全校児童でやるリズム表現は楽しみのひとつでした。佐久間先生がひいてくれるピアノと、佐藤先生のかげごえにあわせて表現するのですが、その表情がなんともいえない子どもらしさで、放課後職員室での話題にたびたびなりました。

『絵かき』もずっと続けてきました。そして文字の指導は『もじのほん』をつかっていましたので、ぼつぼつ文字も使えるようになりました。

そこで、

「おはなししたことも、絵にかいていいんだよ。」

と、吹き出しをつけることをおしえました。

これは、だんだん会話を書くことに発展していきます。

五月二十九日

美幸

リズムわたし



△絵のおはなし▽

リズムのとき

「はやく先生こないかなあ。」

って まってたんだよ。

リズムわたし だいすきなんだよ。

7 みゆきちゃん ちよつとみみかして — (六月)

集団のなかで子どもたちが、人間らしく育っていくようすが、絵や文で知らされました。もう一弘君も道信君も、いろいろな話題で絵をかいたり、お話も楽しそうにできるようになりました。

六月に入って、文字もおぼえかけてきたので、「絵にお話もつけていいよ。」といって、地の文を書くことを教え、話すことから書くことへ進んだわけです。

まだおぼえない文字は、「先生にきいてね。」とか、「わからない字は○で書いてもいいんだよ。」と書いてかかせました。

六月四日

美香

おあみやみか



△絵についての解説▽

学校かえりに、恵美ちゃんが腹痛をうったえました。

その時みんなで相談して、おんぶしてかえることにきめたのです。

みんなで交替で、体の大きい恵美ちゃんをおんぶして、家までおくってあげたのです。

相談するということが、交替でおんぶするというところに、人間らしさを感じました。

六月八日

百恵



△絵についての解説▽

社会見学で動物園に行ったことのことです。

百恵ちゃんは、ひとりになって、フラミンゴからはなれませんでした。

「もう みんなあっちへ行ったよ。」

と さそいかけると

「フラミンゴいっぱい走れるの。」

と ほそい足に心配の目をむけていました。

六月十五日

一弘



六月二十二日

妙子



△絵についての解説▽

町に行ったら、車が続いているのを見ておどろいている一弘君です。

笹谷トンネルが開通して、はじめての日曜日のできごとです。道路の向う側へわたれません。大げさにいえば、一弘君は川崎町の歴史をかいてくれたともいえるのではないのでしょうか。

△絵についての解説▽

おかあさんとおばあちゃんが、けんかをして、おかあさんはハンドバックひとつをもって、家までいったということですか。かなしいことです。

この絵をかいた日、妙子ちゃんは二時間目と三時間目に、小さなおり紙に2412とかいて、わたしのところにもってきました。おかあさんの実家の電話番号だったのです。

六月十二日

仁美



△絵についての解説▽

給食ににじますのかんろ煮がでたときのことです。

にじますの姿、とくにしたあごが「うっ。」とでているので、こわいという仁美ちゃんです。いまの家庭の食膳には、ほねのついたもの、あたまのついたものは、でなくなったのではないのでしょうか。

8 おてがみ

— (七月)

七月になると五十音もおぼえて、文字を使いたくして使いたくして、いろんなことばや、お話をかきたてていきましたが、だんだん『おてがみごっこ』が学級の中ではやりだしました。子どものあそびの流行というか、発生というものは、偶然に起こるものではないことを知りました。

文字というものをおぼえて、それによって見たこと、聞いたこと、したことが文章となり、相手に伝えられることのおもしろさを、子どもたちは気づいたのです。それで小さな便箋をつくらせてやりました。

朝、教室に行くと、教卓の上はおてがみでいっぱいです。

「先生よんで、よんで。」

と、そばで待っているのです。返事は話しかけでいいのです。このおてがみごっこがきっかけで、大宮美香ちゃんの家には蚕をみせてもらいに行くことになりました。

美香ちゃんのおかあさんからも、「ぜひみにきてください。」というおてがみが、子どもたちにきました。そして美香ちゃんの両親が二台の車でむかえにきたのです。

はじめは、

「うわっ。こわい。」

といていた子どもたちは、かえりには一びきずつおみやげにもらってきたので、それぞれ育てることになりました。校庭のすみにある桑の木から、毎日葉をとって、まゆになるまで育てたのです。葉をたべるようす、まゆをつくるようすなど、子どもにとっては驚きでした。

たんぼぼほり、うさぎ見学、川原あそびなど、そのときどきの授業の発展や、話の発展で校外にでて経験できたのも、分校だからできたのでしょうか。

また、小人数の分校だけれども、校地、校舎が割合広いので、上級生といっしょの掃除、草むしりなどの作業もだいぶありましたが、いっしょにお話をしながらやったり、あそびを加えてやったりすれば、楽しく子どもの経験を拡げてやることができました。手先や体を使って働くことも、心を養い作文をかくもとで（元手）にもなりました。

このような生活のなかで、『絵ばなし』を続けてきたのですが、石井美香ちゃんが、ある日突然お話からかきはじめたのです。「せんせい、いっばいお話があるので、えがすみっこになったあ。」と 書いていました。

七月六日

石井 美香

。こずえちゃん はやくこい ぐみとるよ
ぐみいっばいなってたよ
あかくなつてたよ

わたし ろうじのなかからとるよ
ろうじのなかに ぼらがあつたよ

いたいいたい ひっかかるよ

したのほのぐみ くされてたよ

うえのほのぐみ とりつついてたよ

いいのだけとるよ

こずいちゃん どのぐれとったか めせてよ

わたし このぐれ

ないろんのふくろをあげて めせた

七月十四日

大宮 美香

。きお（きょう）あさおきたとき

おかあさんだけ おかかってにいたの

おにぎりつくっていたの

みそおにぎりだよ

きがえをして

かおをあらって

みそおにぎりをつたべたんだよ

もうひとつたべても

4んじぶん（七時四十分のこと）にならないから

おかあさんとおはなししてたんだよ

おにぎりうまいよ（っ）て はなししてたんだよ

こうして『絵のおはなし』から、文章を書くことに移っていきました。もう絵がなくても書くことができるようになったのです。

夏休みの『えにっき』も、絵を大きくかいても、作文にしてもよいように、画用紙に月日を入れるところだけをつくってやりました。

10 だ。れもないので

——（九月）

九月に入って、全員に作文ノートをもたせました。子どもたちはそれぞれ書くことをみつけてきては、書いていました。

ノートの使い方を指導しながら、文意識をもたせるために、一行に一文をかいて、文のおわりには「。」をつける約束をして、何度か練習をしました。しかし つぎのような文にであって驚きました。

九月

道信

。ちのお（きのう）うちへかえっていった。

らだ。

れもないのでねこにごはんをあげました。

じゆうにゆうもあげました。

ねこはた。

べないのでぼくはた。

べろ（っ）てねこのあた。

まおはた。

きました。

道信君ばかりでなく、仁美ちゃんも、美幸ちゃんもだったので、『もじのほん』にまた逆もどりして、単語の学習をしたり、主述のある単文で練習をしました。指導の不徹底だったのです。

11 かおをかくんとして しんでいたんだよ

——（九月）

九、十、十一、十二月は、まとまりのあることがらを見つけ、書いていくことをさせました。

そのなかで、音をききとる練習、かんじ（感覚）を記述することの練習、つまり五官をつかって書くことの練習をさせたわけです。戸をあける音も「ガラガラッ」「ギシギシッ。」さまざまあることをわからせ、自分の耳できいたとおり、目で見たとおりに書いていくことを知らせました。

練習ばかりでなく、擬音や副詞の入った詩や、文章を読んでやったり、または聴写もさせました。

作品(1)

すずめがしんでいたこと

大宮 一弘（十月）

がっこうかえりに、ともひろくんのおうちをとおって、すこしいったら、がたがたみちになって、そこにすずめがしんでいたんだよ。

めをつぶって、かおをかくんとしてたんだよ。

ゆかりちゃんが、

「あれ。すずめしんでいた。

かつひろくん、おうちにもって行って、うめてやれ。」

と いったので、ぼくは

「だめだ。」
と いったんだよ。

ぼくのいえには、てっぼうぶちのいぬがいるんだから、だめな
のです。

てっぼうぶちのいぬは、とりのにおいがすると、つちをほって
くわえるから、かわいそうです。

だから、いぬのこないはたけにもって行って、うめてやりまし
た。

はたけのつちはやわらかいから、すずめはいたくないからです。

作品(2)

おばあちゃんとねてみたいこと 藤田 仁美 (十月)

わたしはおじいちゃんとねています。

おじいちゃんはねるとき、いつも

「がっこう ちゃんとやっつつか。」

と ばかりいいます。

わたしが

「うん。」

と いうとすぐに ぐうぐうねむってしまいます。

めえちゃんは おばあちゃんとねています。

おばあちゃんは

「なあ めぐみ。

おばあちゃん むかしがっこうで、べんきょう うんとでき

たんだと。」

と いったり、まいにちべつのはなしをしてきかれます。

わたしもおばあちゃんと、いっかいでもいいから ねてみたい
のです。

作品(3)

へびにおさけをのませたこと 大宮 美幸 (十一月)

なつやすみのとき、たかおくんのおとうさんが

「きょうたんぼみにいったら、まむすとってきたんだ。にほん

とったから、いっぼんもってきた。」

と いったもってきました。

まむしへびは、ういすきのびんにはいっていました。

にげないように、びんにわらをたばねて、ふたをしてありまし

た。

へびはびんのなかで、ぐるぐるまかっていました。

びんにはすこしみずもいれてあったので、へびはくびばかりう

えにあげて、うごかしていました。

よるのごはんをたべてから、おとうさんが、

「へびさおさけのませっかな。」

と いいました。

へびのびんのみずをなげて、おさけのびんから、こくこくとお

さけをつぎました。

おさけのびんが、からっぽになりました。

へびはおさけをのんで、だんだんくびをかくんとして、ちぢめ

ていきました。

おとうさんに、

「へびにおさけをのませてどうするの。」

と　いうと、

「でものがでたときの、くすりにするんだよ。」
と　いいました。

そして　べつのふたをぎしんとして、とだなのうえのところ
に　しまっていました。

わたしはいまごろ、おさけをのんだへびどうなっているか、
み　たいのです。

と　つてもみたいのです。

けれども、とだなのうえにあるのでみられません。

よ　っぱらってねむってしまったかなあ。

作品(4)

ろばのばしゃにのったこと　藤田　恵美　(十一月)

やまがたのけいばにいきました。

おとうさんやおばあちゃんといきました。

けいばのまんなかに、こどものあそびばがあります。

そこには、いきているろばや、こどものじてんしゃがあつて、

おかねをだすとのせてくれます。

ろばは、しろにちよつとくろがまざっていて、あたまのけはし

ろで、かぜがふくとざさざさうごきます。

しっほはしろで、ふさふさあるくとゆれます。

そのろばは、ばしゃをひきます。

そしてこどもがいないおとなのひとは、のることはできないの
です。

わたしがそこへいってみてたら、しらないきものをきて、めが

ねをかけたおばさんがきて

「おばさんこどもがいないから、いっしょにのってね。」
と　いって　てをひっぱっていきました。

ろばのおじさんのところにいって、おばさんが

「のせてください。」

と　たのみました。

ろばのおじさんは

「はい。」

と　いいました。

かいだんをふたつあがつて、わたしがのると、おばさんは

「わたしこどもがいないので、よそのこどもかりてきたんだよ。」

と　いって、わたしのわきにのりました。

ろばは、わたしたちのばしゃをひっぱって、こんくりいとのだ

うろをまわりました。

ばかばかとおとをたててはしりました。

ろばのしっほがふさふさゆれました。

ろばのおじさんは、ばしゃのいちばんまえにのって、あんま

りはしらなくなると、たけにひもがついているので、

「はいっ。」

と　いって、ろばのおしりのところをたたきました。

ろばは、たたかれてもなかないではしりました。

よだれをながしてはしりました。

ろばのおじさんは、おばさんに、

「よそのこつれてきたんだごつて、さあびする。」

と　いって、またろばのおしりをたたいて、にかいまわってく

れました。

作品(5)

こめをついたこと 大宮 美幸 (十二月)

おしよがつがくるので、こめつきをしました。
おとうさんとつきました。

こめつききかいにこめをいれて、すいっちをいれたら、がたがたとうごぎだしました。

きかいにいれたこめは、げんまいというのです。

すこしたつと、ちゃいろのこながきかいのくちから、ささささ、ささささとできました。

わたしはそのこなをふくろにいれるしごとをしました。
おとうさんは

「きょう、しんこめごはんかっからな。みゆき。」

と いました。

わたしは

「うん。たべる。」

と いいながらこなをふくろにとるしごとをしました。
そして

「なにのおかずでたべんの。」

と きいたら

「うめぼしだ。うめぼしでくうとうまいど。」

と いました。

すこしたつたら、ちゃいろいこなでなく、しろいこなになりました。

しろいこなは、あたたかいこなでした。

12 犬の耳は音のするほうにうごく — (一月)

子どもたちが集団の力によって、ゆたかな表情・ゆたかな表現力をもつようになったと思うころ、わたしは一方で退職の決意をかためたのでした。

ほんとうに迷いました。そして一時間一時間惜しみながら、子どもたちといっしょにリズム表現をしたり、自分で読んでやりたいと思っていた絵本など、むちゅうになつて読んでやりました。

分校の先生方も、心残りしないような、子どもたちとの生活ができるようにと、心くばりをしてくれました。

職員室の黒板に『あと〇〇日』などとかいてくれました。一日ずつ減っていくのを、とめたい気持ちですごした日日でした。

五七年の一月、給食担当者の集りで、全国一勢『カレーの日』という日が決められ、分校にも『カレー』がやってきました。

作品(6)

カレーの日のこと 藤田 恵美 (57・1・25)

「カレーすき。」

って せんせいがききました。

みんな

「うん。」

と いて たべてたけれども、ももえちゃんが

「わたしね、ふわふわのあぶらにくはいってときあるから、き

らい。」

と いました。

そのとき、わたしが

「そういうにははいってたら、かむと きもちわるいから、かまないで、のんでやるといいよ。」

と おしえてやりました。

そしたら ももえちゃんは

「かたいにくも、ときどきはいつて、はにはさまんの。」

と いったので

「にくにはさまったら、べろでとれ。」

と またおしえてやりました。

「べろ 手のかわりになんの。おかしい。」

と ももえちゃんは、わらいました。

給食をたべながら、このような対話があったのを、恵美ちゃんはちゃんと『切り取り』ができて、書きあらわすことができたのです。この対話は、恵美ちゃんと百恵ちゃんだけでなく、学級全員の対話に拡がっていったのです。

(恵美ちゃんは、自分と百恵ちゃんの対話を切り取ったわけです。)

対話

。「べろは右へうごかしたいと思うときは、右にひとりでごく。」

。「目もべろと同じだ。」

。「耳はうごかない。」

。「犬の耳は 音のするほうにうごく。」

。「ねこの耳もうごく。」

。「ほんとか。」

。「ほんとだ。」

妙子。「せんせい、わたしのジョリーでさげに入るから、あしたがつこうに つれてきてもいい。」

このようなことで、翌日は犬を教材に学習することになりました。

一・二校時 作文・理科 犬をだっこしたりなどして観察と話し合い

し合い

三・四校時 図工

ジョリーのえをかく

五 校時

雪の中でジョリーとあそぶ

また各教科の授業のなかでも、子どもたちの発見―思考のすばらしさに、はっとすることが多くなってきました。

例えば、 $74+3$ $60+20$ のような計算の指導をしていたとき、4に3をたさないで、7に3をたしてまちがう子どもがいました。わたしが首をかしげていると、

「本のようにして(教科書のような横の計算のこと)計算するとね、どっちが十のかたまりか、まちがうときあるから、冬休み帳(宮教組編)でおぼえたようにして計算すると、ぜったいまちがわないよ。(74+3+1 というような計算方法)」

と、子どもが発言してくれたので、なるほどと教えられました。作品もまた深まりをみせてくれました。

作品(7)

こままわし

大宮 美香

たかいおそらから 小さなゆきが

そそそと ふっていたとき

わたしは こままわしのことを

かんがえました。

そとへでて こまのひもを

ぎっぎっぎっぎと ひっぱりながら

まきました。

つもったゆきの上に

しゅつとなげたら

こまは よこむきになって

ぐるぐるまわりました。

白いゆきが

ささささと おとがして

こまにはじかれました。

じどうしゃのたいやが

ゆきをはじいて はしっていくときと

おなじように はじきました。

なんかいまわしても

ゆきの上では

よこむきにしか まわりませんでした。

13 おさいふがいっぱいになったよ (作文の授業と作品)

第一学年 国語科 (作文) 学習指導案 82・2・23

授業者 太田 貞子

一、単元名 かきましよう

二、単元について

。子どもの身近な経験のなかから、心に残っている題材をえらびだして、ある程度の長さのまとまりをもった、作文を書かせることを意図する。

。取材する態度も積極的になり、題材カード(題材を記したカード)も、つねにたまっているようになった。(カードを入れておく袋も、子どもたちがくふうし、この袋を『おさいふ』といつてよろこんでいた。)

。学校生活の安定と充実にともない、文字の習得もすすみ、表現意欲も旺盛になっているが、ときには何をどのように書いたらいいか、また単なる羅列になったりして、書きすすめない状態になるときがある。

そこで経験したことの中から、書きたいことをえらぶことや書くことがらをはっきりさせて書くこと、したことの順序をたどって書くことの指導をした。

。子どもたちの文章表現についての差は、あまりみられなくなっている。

三、指導の経過

四月。自由に話す。絵ばなし

五月。絵にふきだしをつける

六月。絵におはなしをつける

七月。絵におはなしをつける

九月。ひとまとまりの文章(単一場面)

三月。切り取り 会話 発見

くわしく見たこと、おもしろかったこと、おどろいたこと、はじめてのこと

四、指導のめあて

いちばん書きたいことをえらんで、ありのままに書く力をつける。

五、指導計画（五時間）

(1) まわりのことに目を向けた作品を使って話し合わせる。

『カレールの日』の作品

（表現意欲喚起の指導）（取材の指導）—— 一時間

(2) 書きたいことをはっきりさせてから記述させる。

（記述の指導）

二時間（本時1②）

(3) 書きおわった作文を読みなおす。

プリントした作品をつかって「」や。をつける学習をさせる

（推考の指導）

一時間

(4) 指導のねらいにそって、すぐれた作品をとりあげて話し合わせる。

（鑑賞・批評の指導）

一時間

六、本時の指導計画

(1) 本時のめあて

書きたいことをはっきりさせてから、書かせる。

(2) 準備物

前時に使った作品

題材カード

(3) 本時の指導過程

時	子どもの主な活動	指導上の留意点
	1 本時の学習のねらいを知る	。ねらいを板書
	2 きょう書きたいと思	。思いだしながら書くことが、だ いじであることをわからせる。 。題材カードは、つねに取材意識

20分

っていることを発表する。

をもたせるために、最近は時間を別にとらないで、見つけたときに書きとめさせておく。

。友だちの発表をきき、題材がいろいろあることに気づかせる。

。いちばん書きたいこと はっきりどこから書きはじめるか させる。

個別指導

一対一の話しあい

20分

3 心にきめておいたことを書く。

4 書いたものを発表してもらう。

。気づいたことも発表する。

5 本時のまとめ

。教師が読んでやる。

。次時報告

(4) 評価

書きたいことを、よろこんで書くことができたか。

(5) 板書事項 略

(6) 備考

。発表するときの子どもの表情を注意して観察する。

。次時も記述の続き

。二月の指導計画

めあて

いちばん書きたいことをえらんで、ありのままに書く力を

つける。

めあて

。次時報告

つける。

取材指導で

・書く意識をはっきりもって、進んで取材し、いちばん書きたいことを書かせる。

・具体的生活事実のなから、切り取らせる。

構想指導で

・書く前に話しあったり、別の作品を使ったりして、大まかに書きだし、とちゅう おしまいの意識づけをする。

記述指導で

・具体的な事実をありのままに書かせる、特によく見る、思いたすこと。

・ようすがよくわかるように書かせる。

推敲指導で

・書きおとし、書きたりないところなど見つけるため、自分の作品はかならず 読みかえさせる。

鑑賞の指導などで

・ありのままに、くわしく見る部分をしっかりとつかませる

・自他の作品をくらべてみさせる。

・授業を終えて、子どものようすなど

・授業をみてくださった方々

すばる教育研究所大河原サークル

校内有志

・本時の過程について

2の発表は何人かえらんでさせようと思っていたが、全員発表したいというので、全員発表。

3の書くしごとについては二十分とったが、書きたいこと

の七割以上は書ききっていた。

書きだしに時間をとった子ども、恵美、美幸、妙子で個別指導にあたった。

4については、全員みんなの前で読んでもらいたいというので、全員のを読んだ、時間少々超過する。

・その他 十一月にも宮城県音楽サークルで、表現の関連でみたいというので、授業をみてもらっている。

授業でうまれた作品

作品(8)

よるこわかったこと

石井 美香

「う、う、う、う」

と一かいねむって目をさましたら、げんかんのほうからきこえてきました。

へやをみまわすと、こずえちゃんがふくをはんぶんぬいで、そのおとをきいているようでした。

「こずえちゃん なにすったの。」

「おふろにはいっとおもったつけ、なんだかこえきこえてくんた。

おっかね。美香いってすけろ。」

と いったので、こずえちゃんのあとをついて、かいだんをおりていきました。

そしたら、おばあちゃんもおきてきて、ぼったりあいました。

「なんだ。こずえか。だれか人がきたんだとおもったや。まだおふろさはいんねのが。」

「うん。おばあちゃんなしておきてきたの。」

と こずえちゃんがきくと

「うん。」

と 行って、そのようすをきくようにしていました。

「わたしおふろにはいっとおもってだっけ、人げんのこえみたいなのきこえてきたんだ。」

と こずえちゃんがいうと、

「んだべ。おばあちゃんもそのようにきこえたから、おきてきたんだ。」

と いったので、わたしはすっかり目がさめて、きゆうにさむくなってきました。

そうしていると、

「にゃあお、う、う、う、う。」

と いいました。みんなやっとなごだったとわかりました。

こずえちゃんは、おばあちゃんとげんかんのとをあけて、

「しいっ。」

と 行ってぶくりました。

みるととなりのねこでした。こずえちゃんは

「ああ、びっくりした。人げんだとおもった。」

と いうと、おばあちゃんも

「ほんとにゃ。」

と 行って

「はやく、おふろさはいってねるんだはな。」

と みずをのみながら行って、ねどこにいきました。

ねこはやねを

「にゃお、にゃお。」

と ないてわたって、となりへかえっていきました。

作品(9)

じしゃくあそび

大宮 美香

「おねえちゃん、じしゃくであそぼう。」

と みゆきがいうので、かねのぼうるに水をくんできて、じしゃくのついたさかなを水にうかべました。

さかなをうごかすとき、じしゃくをそばにやっとうごかします。

「みゆきもやるでえ、みゆきもやるでえ。」

と いうので、じしゃくをかしてやりました。

みゆきは、じょうずにおよがせられないので、さかなはぼうるのへりにぶつかって、かちん、かちんとおとがしました。

「このようにすんだよ。」

と わたしがおよがせておしえてやると、こんどはじしゃくをあまり、さかなにちかづけるので、さかながつれてしまいました。

なんどもおしえて、やっとおよがせられるようになるよ、

「わあい、およいだ。」

と 行って、むちゅうになっておよがせました。

それから、そとへでてじしゃくにつくものをあつめてあそびました。

作品(10)

ねこがしんだこと

村上 百恵

ねこがしんだとき、わたしはなきました。

ねこといぬは、わたしのたからものだからです。

さびしくて、さびしくてたまりません。

わたしはさいしょから、ねこはしぬのではないかとおもっていました。

それは、おかあさんがにかいにあがってこないように、ようふくかけでとがあかないように、しかけをしたからです。

あさおきて、こたつにあしをいれてみると、ふわっとしました。

「ねこだ。」

とおもって、もうふをあけてみると、やっぱりねこでした。

ねこは、だいてみるとかたくなっていました。

「たま、たま。」

と よんでももうだめでした。

そして、せなかのところのけがやけて、ちやいろになっていました。

おかあさんが、ねこをみて

「ねこ、おかあさんさばけてくんでねえが。」

と いった、ごはんのよういをはじめました。

ねこは、とをあけるのをあきらめて、こたつにはいつてがすでした。

だんだよ。

にかいにくればしななかつたとおもいました。

そして、ねこをじゅうたんのうえにおくと、おかあさんがそれをみて、しんぶんがみでさぶとんのうえにのせておきました。

じゅうたんには、ねこのけがくつついていたので、わたしはにかいにしかけしなければよかったのとおもいながら、ちりがみにけを

ひろって、うめてやりました。

うちのなかにもどってくると、ばあちゃんもおきてきていて

「みつこ、なんでさぶとんさおいたの。」

と いいました。

おかあさんは

「おれ、きもちわるいからおいたんだよ。」

と いていました。

ばあちゃんは、ねこにしんぶんがみをかけておきました。

そのばんからわたしは、ぬいぐるみのいぬをだいてねました。

そして、ねこのかおをおもいうかべようとおもっても、なかなかお

もいうかばせられません。

ねこのからだだけしか、うかべられません。

そして、あたまがごちゃごちゃになってしまいました。

ねこのかおをおもいうかばせたいのです。

がっこうからかえっても、おもしろくありません。

ねこのことばかりかんがえています。

作品Ⅲ

はなのあかいねこがきたこと 石井 道信

ゆうがたねこが、しんやおにいちゃんのへやで、どこかのねことけ

んかしていました。

そして、よなかにぼくのべつとにきて、ふとんのうえにあがってね

たんだよ。

あさおきてみると、ねこのみぎのみみのところのけに、ちがついて

いました。

ぼくがだいて、すとうぶのところにつれていくと、おとうさんが

「ねこぼりつかむな。」

と いいました。

はなすとねこは、すとうぶのそばでまるくなってねむりました。

ねこはけがをしたので、ぐあいわるいのだとおもいました。またよるになるとねこは

「にゃあお、にゃあお。」

と ないてそとにでていきました。

ぼくは、ねこげんきになったんだなあとおもいました。

そしたら、そとでまたけんかがはじまりました。

「にゃあお、にゃあお。」

「ごろにゃお、ごろにゃお。」

「にゃん、にゃん、にゃん。」

と なきました。

とをあけてみると、けんかをしにきたねこは、はなのあかいねこだったんだよ。

作品⑫

やぎごやのそうじをしたこと

奥山 京子

やぎごやのそうじをしたんだよ。

めぐみちゃんとひとみちゃんとたかはるとわたしと4にんでしました。

はじめに、ほうきではきました。

それからわらをもつてきてしいてやると、やぎはそのわらをたべました。

めぐみちゃんもひとみちゃんもたかはるも、わらをはこびました。

やぎは、くちをもぐもぐとしてくうんだよ。

そしてじゃがいももたべさせたんだよ。

みんなで、うんとうんとうんとうんとはこんだので、やぎがこやの

なかをあるくと、がさがさなって、あったかそうになりました。めぐみちゃんとひとみちゃんは

「ずいぶんやぎおおきくなったな。」

と いいました。

やぎはそうじをして、わらを入れてもらったのでうれしそうにしていきました。

作品⑬

おじいちゃんがけがをしたこと

藤田 恵美

わたしたちが、がっこうからかえっていきました。

おばあちゃんが

「ごはんたべっぺな。」

と いいました。わたしとひとみちゃんが

「うん。」

と いったそのとき、でんわがきました。おばあちゃんは

「そら、きょうこちゃんからでんわきた。はやくあそびにこいって。」

と いったごはんのようないをしていました。

でんわには、ひとみちゃんができました。

また おばあちゃんは

「きょうこちゃんいからだべ。」

と いうと

「どっかのおばさんからだ。」

と いうと、おばあちゃんにわたしました。

「はいそうです。」

あらあ、そうですか。

すぐやりますから。

「どうもありがとうございます。」

と、いって、でんわをきると、おばあちゃんはごはんのよういもしないで、ないてしまいました。

そして、おとうさんのこうばに

「じいちゃんけがしたんだと、はやくいってけろ。」

と、でんわしてやりました。わたしが

「だれから。」

と、いうと

「じいちゃんけがしたんだと、んだがらばすでいげって、あんなにいったのに。ゆうごときかねがらがすがすんだいちゃ。とっしよりのにばいくでなんていって。」

と、なみだをふきふきいきました。

おばあちゃんのないたこえきいたら、ごはんたべたくなりませんでした。おばあちゃんもむねがいつぱいになったとおもいました。

おばあちゃんもごはんをたべません。

わたしはおじいちゃんのけがおつかないから、きょうこちゃんのいえにいきました。

あまりいいでかえってくると、おかあさんがいました。かずこおばちゃんもいました。

そして、ふとんだのたおるだのをつつんで、びょういんにいくよいうをしていました。

わたしもびょういんにいくといっ、じどうしゃでせんだいにいき

ました。びょういんにいくとおじいちゃんは、べつとのうえでにこにこして

いました。わたしは

「おじいちゃん。」

と、いって、あんしんしました。

いくまで、いたいたいといっ、うなっているんだとおもっていました。ほんによかったです。

でもべつとからおりられないので、かわいそうです。

ひとみちゃんも、そうおもっているとおもいました。

うちにかえってきたら、きゆうにおじいちゃんとおばあちゃんがいなくなつたので、わたしはねるときなみだができませんでした。

そしてなみだをながしながら、ねむりました。

それから2にちぐらいたったとき、おばあちゃんがかえってきました。わたしはよろこびました。

「おじいちゃんおつたの。」

と、いうと

「ふみこおばちゃんにたのんで、おふるにはいりにきたんだ。めぐみもひとみもゆうごどきくようになったなあ。」

と、いわれました。

わたしは、そのばんおばあちゃんとぐっすりねました。

作品(14)

らあめんをつくったこと

藤田 仁美

おとうさんが

「らあめんたべたいなあ。」

と、いいました。

おかあさんが

「やんだあ。」

「仁美つくってこい。」

と いったので、

「いいよ。」

と いました。

わたしはがすをつけて、なべにみずをいれてかけました。

そしてらあめんにとってきました。

おゆがぶくぶくなくなってきたので、らあめんをいれて、はしでかんま

かしている、だんだんやわらかくなってきました。

そしてゆげがでてにたったら、らあめんのこなをいれました。

らあめんのあぶらもいれました。

できあがりしました。

ひをけして、どんぶりをだしてわけたら、らあめんのおいがでて

きました。

そのにおいは、みそらあめんのおいです。

わたしはしずかにどんぶりをもって

「おとうさん、はい。」

と いただきました。

おとうさんは、つゆをいっかいのんだら、

「うまい、うまい。」

と 言ってくれました。わたしはとってもいいきもちでした。また

「うまい、うまい。」

と 言って、すうすうたべました。わたしはさっきよりも、もっと

いいきもちになりました。そしたら

「おかあさんよりうまいなあ。」

と またいいながらたべました。

おかあさんがおとうさんに

「仁美さ、またおとうさん、うまいってほめるんでねえが。」

と いったら、そのとうりで

「そうとうこれはうまい。」

と 言ってくれました。

おとうさんは、あったかいらあめんをたべたから、かがほかほか

そうに、あかくなりました。

わたしはよかったなあ、あんしんしました。

作品(15)

ねこがくびでとをあけたこと 大宮 美幸

がたがたとおとがしたので、みるとねこがくびをうごかして、そと

からくるところのとをあけていました。

びっくりしました。

すこしずつあけて、じぶんがおれるくらいになると、そこからは

いって、わたしたちがいるこたつのところまできました。

「おかあさん、ねこくびでとをあけてきたんだよ。」

と いうと

「はじめてだなあ。またそとへおいてきてみる。」

と おかあさんがいきました。

わたしはねこをだいてそとにでたら、まっくらでした。

「きょうこちゃんもこい。」

と いうと、ふたりでさぎょうばのところにおいて、はしっていえ

のなかにはいりました。

そしたらねこはにやおにやおないで、またとをあげました。

よくみたら、はじめはでがちゃがちゃかっちゃいで、すこしあけるとくびであげました。

「ねこちからあつこだ。」

ときようこちゃんがいきました。

おかあさんはねこをだいて、ねこのかおみていたら

「はらへったみでだなあ。」

と、いって、かんづめをきって、ねこのごはんにまぜてやりました。そして

「くびでにかいもとをあげたから、つかれたべ。それけえ。」
と、いってたべさせました。

ごはんをたべおわると、ねこはわたしのところにきました。

だからだいてねこのくびを、もみもみしてやりました。

ねこはごろごろのどをならしました。

だいてこたつにねたら、かんづめのおいがしました。

作品⑩

ねこのおかあさんが あかちゃんねこに

ねずみをやったこと 大宮 一弘

ごはんをたべていたとき、ねこのおかあさんがかまやのほうから、ねずみをくわえてきました。

ねずみのあしをぶらぶらさせて、せなかのほうをくわえてきました。そして、あかちゃんねこのそばにおいて、じぶんのあしでふつとばすと、ねずみはよたよたとあるきました。

するとあかちゃんねこは、ねずみにとびかかって、くわえてそれからはなして、にゃあにゃあとなきました。

おかあさんねこは、またあしでふつとばすと、あかちゃんねこはまたおっかけて、くわえてはなして、にゃあにゃあとなきました。

なんかいもすると、ねずみはいきわるくなって、あるけなくなる

あかちゃんねこは、にかいにくいかいだんのところで、にゃあにゃあ

あないて、あたまからたべたんだよ。

ぼくが

「ねずみ、こっこにたべられたわ。」

と、いうと、おかあさんは

「ねこ、ねずみがいちばんすきなんだ。」

と、いいました。

あかちゃんねこは、たべおわるとこたつのところにきて、ぐっすり

ねました。

おかあさんねこは、またかまやのほうにでていきました。

14 おわりに

このような作品がでてきたところで、三月になってしまいました。子どもってすばらしい。みんなそれぞれやさしい心と、ゆたかな表現力をもちあわせていることをかんじました。

とかく数字にあらわされるものによって、人間が評価されがちな現行の風潮に対して、人間にはこんな美しさもあるのですと、学級通信『とらのこ』で作品を家庭にいらせてやってきました。

このことによって、学校という集団のなかで、子どもたちが何を学ぶのかということ、理解してもらおうのに役立ったようにも思っています。

(元・川崎小前川分校)

太田さんは、この報告でも「子どもの可能性のすばらしさ」をみせてくれています。ここからうける感動はいつも新鮮です。実践することのよるこびにわたしたちをいざなってくれます。しかし、ここでかたられていゝものは、「子どもの可能性」のすばらしさだけではありません。それは「教育（あるいは教師）の仕事のもつ可能性」のすばらしさでもあります。この記録をよむなら、蔵王山麓に生活する、この十人の子どもたちがそれぞれに美しく、たのしくみえてきます。それと同時に太田先生の姿もますます尊敬の光につつまれてきます。もし、太田先生にいだかれることがなかったら、この子どもたちの可能性はどうなっていたのでしょうか。子どもの可能性が無限だというなら、教師の可能性も無限なのです。おそらく太田先生がさらにこの仕事にとどまっていられたら、いっそう深く、教育という仕事の可能性をきりひらいてみせてくれたでしょう。では、教師はいかにしてその実践の可能性を拡大していくことができるのでしょうか。「なすことによって学ぶ」ということばがあります。実践は実践によってしか学ぶことができないのでしょうか。わたしは太田さんがたいへんな勉強家であるこ

とをしています。太田さんは戦前・戦後の生活つづり方の思想・実践・歴史にも深い理解をもっています。その積極的な、にないてのひとりでもあります。サークルの日常的な組織活動もおしすすめ、つねに新しい理論と実践に学んでいます。さらに世界や日本の歴史的な現状や地域とのかかわりのなかに、わたしたちの仕事や位置づけようともしています。つづり方指導を国語教育、全教育体系のなかにみきわめたり、低学年教育の特殊性のなかにその任務をみきわめようとも意図されているようです。つまり、太田先生はすぐれた教・手であると同時に、すぐれた学・手でもあったということです。子どもでも教師でも学ぶことなくして、その可能性をきりひらくことはできません。その意味では、ここでしめされた太田先生の実践は、あくまでも太田先生の実践です。しかし、その半面からみれば、すべての実践は歴史的事であり、社会的なものです。（その到達と、限界において）太田先生のようなすぐれた教師はその謙虚さを忘れることがありません。これが、太田先生の創造的な仕事、新しい児童像がうみだされる源泉ではないかと、わたしはいつもおもいつづけてきました。（すばる教育研究所）